科学的理論化をめぐる

On Scientific Theorizing

中村 和生

NAKAMURA Kazuo

This paper focuses on the problem of foundation in science. In order to approach this topic, Michael Lynch's criticism of Alfred Schutz's demarcation between common-sense rationality and scientific rationality is cited. From this, it is claimed that the demarcation to be examined is between science as working and scientific theorizing. Regarding the former, laboratory practices are discussed based on findings of laboratory studies. Regarding the latter, a theorizing in sociology is analyzed. By these double demonstrations, it is recognized that there is no such demarcation and no need for scientific foundation, and that we should study common-sense categories and 'scientific' practice in their own rights.

1. はじめに

社会学は、その創設以来、自らに「科学的」なる特性を付与しようという試みを展開してきた。コントの知識の3段階説はもちろん、「社会的事実の客観的実在は社会学の根本原理である」と唱えたデュルケームの方法論も、そうした方向性の下に捉えることができる。例えばデュルケームは『自殺論』の冒頭において「実は日常語というものは、それによってあらわされている概念と同じように、いつも曖昧なものだ。(中略)学者は、研究しようとする事実群に、科学的な取扱いのために必要な同質性と特定性を与えるために、自らそれを構成しなければならない。」[Durkheim 1897=1985:17-8]と述べている。

このように常識的概念を科学的概念に修正していき、それによって自らの探求で得られた知識を保証しようとする態度を、基礎づけ主義とここで呼んでおきたい。こうした基礎づけ主義においては、科学と常識の弁別的な区別がたやすく主張できることになる。

ところで、こうしたデュルケームの方針に対して、常識的概念それ自体の秩序だった使用に注目すべきことを最初に説いたのは、おそらくはアルフレッド・シュッツであろう。シュッツが「社会学者の構成する思惟対象は、人々のあいだで自らの日常生活を営んでいる人の常識的な思惟によって構成された思惟対象と関係し、そしてそれに基づけられている」[Schutz 1973=1983:52]と述べたことは、常識に対する態度において格段の進歩を社会学にもたらしてくれた。常識的概念それ自体がいかに秩序だって用いられているのか、このことはデュルケームの視野にはなかったからである。

しかし、常識的概念についてのシュッツの主張はそれを科学的概念にきちんと置き換えるためのものであった。つまり、常識的概念に基づいた人々の行動を「社会学者が、自らの携わる科学の手続き上の諸基準に従って観察し、説明しようとする」[ibid.]ことになる。この主張から、一見したところ進歩に思えたこうしたいき方は、結局のところ、デュルケームと同じく常識に対する修正主義的な態度をとり、科学的な基礎づけを鼓舞するものになってしまっていることがわかる。

本稿では、シュッツの科学論にさえも見られるこの科学の基礎づけ主義を問題としたい⁽¹⁾。つまり、ここで問いたいのは以下のことである。我々の学問的営為は、常識からは弁別的に区別され、その常識に対して特権的な地位を持つ「科学」なるものによって基礎づけられなければならないのか。そして、自然を対象にするのであれ、社会を対象にするのであれ、既にこれまで行われてきた諸々の学問は、この弁別的な区別によってもたらされた基礎づけによって確固たるものとなっているのか。

この問題にたいして以下の手順でアプローチしていきたい。まず、シュッツによる常識と科学の弁別的区別をめぐるなされた議論を取り上げる。そこから、論じるべきトピックが、常識的特性を備える「労働行為としての科学」と「科学的理論化」との弁別的な区別[Schutz 1962=1985:59]であることを引き出す。それゆえ、まずは労働行為としての科学の事例として、実験室研究を取り上げる。次に、科学的理論化の事例として社会学の理論化作業を取り上げる。そして、これら経験的研究に基づいて、科学と常識の弁別的区別の是非とその含意を問いたい。

2. M.リンチによるシュッツ科学論の批判

まず、この目的の出発点としてM.リンチによるシュッツ科学論の批判[Lynch 1988]を用いたい。リンチは、まず、科学と常識的合理性の弁別的な境界設定をシュッツが行っているとし、このことを中心にして科学に関するシュッツの諸主張を5つの提言によって定式化した。その上でこの提言と対照を成す反対提言を挙げて、そのことを証明してくれるものとして、科学の社会的研究(Social Studies of Science)や科学のエスノメソドロギー研究から様々な経験的知見を引き合いに出した[Lynch 1988:82]⁽²⁾。その提言と反対提言は以下のようになる。

提言

1. 諸科学の統一及び科学的方法の普遍性
2. 諸科学の自律性、及び常識的合理性・社会的行為からの諸科学の明確な区別
3. 明確な前提に基づいた諸命題が論理的に構築されたシステム、としての科学理論
4. 非具現的で公平無私なものとしての科学理論
5. 個人的出来事としての科学的理論化

反提言

- 1'. 諸科学の異種混成、及び科学的方法の局所的編成
- 2'. 科学的行為と、日常的推論・社会的相互行為の分離不可能性
- 3'. 科学活動についての認知的な説明の不十分性
- 4'. 利害関心があり具現的な、科学者・数学者の活動
- 5'. 本質的に社会的な現象としての科学活動[Lynch 1988:82]

リンチによれば、科学社会学者やエスノメソドロジストは、科学に関するシュッツの諸主張を道しるべとして研究を行なっていった。そしてそのことが、逆にその主張への批判を生みだし、その後に展開されていく諸々の科学研究を鼓舞したことになる。歴史的系譜としてはこのことは正しい。リンチが指摘するように、科学の社会的研究を行なった者たちは、シュッツの諸概念が実際の科学活動にはあてはまらないものであることを経験的に例証していった。

例えば、K.クノール-セティナによれば、シュッツに基づきガーフィンケルが展開した科学的合理性は、マートンによる「科学のエートス」に極めて似ている点で、同様の批判にさらされることを述べている。更にその中では、「ガーフィンケルは、行為に決まりきって現れるルールについて語っているので、[行為に直接には関係しない「エートス」について語った]マートンをはるかに越え出ている」[Knorr-setina 1981:32]として、ガーフィンケル（およびシュッツ）に多くの罪を帰せている。また、B.ラトゥーア & S.ウルガーは、以下のように述べている。

こうした[科学の定義をトートロジカルに行なう]策略はどちらかといえば一般的であるけれども、シュッツのような著者によって用いられる時には特に際だつものである。シュッツは、作業中の科学者の実際の実践を現象学的に記述するという公然とした(professed)目的を持っていたのである。認識論者によって与えられた観念に馴染みの観察者なら、科学者の実践活動の中に、敬意に値すべき言説の例を見定めることは容易である。かくして、科学者は、科学者なので科学的に作業をしているように見えてくる。(中略) 我々の立場は、こうした科学と常識の区別が存在するのならば、その存在は経験的に例証されなければならないというものである。ゆえに、我々が科学活動を描いていく際には認識論的概念を回避していく[Latour & Woolgar 1979:153]。

ラトゥーア & ウルガーによれば、シュッツのように「科学者は、科学者なので科学的に作業をしている」というトートロジカルな定義をするのなら、結局、科学活動の内実が解明されえないのであり、そうした定義を放棄した上で研究をしていく必要があることを主張している。こうした主張から、実験室研究を行なっていた科学社会学者が、シュッツによって定式化された科学的合理性によって実験室の活動を捉えようとするのは間違いであると指摘していることがわかる。これらの主張に基づいて、リンチは、シュッツの提言とみなせるものを定式し、その反対提言と対照させているのである。

3. 「科学的理論化の態度」を備えるものとしての科学活動

しかしながら、道しるべとしてのシュッツが批判されていくという歴史的経緯によっては、その中で行われたシュッツ批判じたいが妥当であることは必ずしも引き出されない。こうしたリンチのシュッツ批判には過剰な点があることが指摘されている[浜 1998]。本稿にとって重要なのは、リンチは、シュッツが科学的理論化（の態度）に関して主張したことを、労働行為としての科学に当てはめて批判したという指摘である。つまり、シュッツにおいては、理論化とそれ以外の諸々の科学活動とは、その性質が弁別的に異なることになる。まずは、この指摘じたいの妥当性を確認しておきたい。この指摘を根拠づける主張は実際シュッツの著作に直接に読み取ることができる。

しかし、理論的な思惟は、労働という性質をもった行為ではない。(中略) 理論的な思惟は、確かに(測定し、道具を操り、実験をするといったような)労働行為に基づいている。(中略) だが、労働の世界の内部で遂行され、さらにその世界に属しているそれら諸々の活動は全て、理論化の条件であるか、さもなければ理論化の帰結であって、理論的な態度それ自体に属するものではない。それら諸活動は、理論的な態度から容易に切り離されうるのである[Schutz 1962=1985:59]。

それゆえ、実験室活動の諸特徴を挙げ、それが単純に科学的理論化の態度とは異なるが故にシュッツの提言が間違っているのだと非難するクノール-セティナやラトゥーア&ウルガーの主張は、シュッツ理解としては端的に誤っていると言う他ない。そうした主張は、シュッツが、科学的理論化と労働行為としての科学を弁別的に区別したことをまるで考慮に入れていないのである。この点に関してリンチは以下のように述べている。

理論化が実験室における労働行為から切り離されていることをシュッツは強調しているのも、実際の行為の観察ではシュッツの提言の「テスト」にはならないのである。

しかしながら、科学的理論化を構成している様々な条件が存在論的に言及されるという問題が依然として残っているのである[Lynch 1988:80]。

ここから、リンチ自身は科学的理論化と労働としての科学の弁別的区別をシュッツが設けていたことを把握した上で議論を組み立てていることがわかる。上記のような反対提言を掲げるにあたって、リンチがこの区別を重要視しなかったのは、科学的理論化の諸特徴が科学活動にも関連性を持たざるをえないことが明らかにされていたからである。よって、科学の基礎づけ主義を問題にするのなら、本当に問うべきトピックはこの区別じたいの妥当性なのである。このことに関するリンチの主張[ibid.:80-1]は示唆的なものに留まるが、以下、それを二つの論点として定式し、それを経験的知見で補っておきたい。

第一の論点は、理論化以外の科学活動においても、シュッツの提言のような主張が科学者自身によって言及されるということである。このことは、N.ギルバート&M.マルケイによる科学者へのインタビューから明らかである。彼らは、例えば、科学的真理がいかに入手できるかについて自然科学者にインタビューしている[Gilbert & Mulkay 1984=1990:chap.3]。そこにおける彼らの分析の着目点は、自然科学者は科学的真理を説明する際に、真理は観察に基づいて発見されるという考えを支持する語りである「経験主義的レポーター」を好むにもかかわらず、真理の発見にまつわる諸々のコンティンジェンシーを念頭においた語りである「偶然的レポーター」を用いらざるをえないこと、そして一見したところ対立するように思われる二つのレポーターを両立可能にしていく説明実践が行なわれることである。

ここで注目しておきたいのは、まず、「スペンサー理論の熱狂的な支持は『厳密に証拠に基づいて』生じたとインタビューの最中で彼[自然科学者]がすでに強調した」[ibid.:198]とあるように、科学者自身が、労働行為においても、シュッツであれば「厳格な諸基準に従って進行する一つの過程」[Schutz 1962=1985:64]と表現するような、科学的理論化の弁別特性に言及しているということである。

もちろん、このような場面での自然科学者の労働行為とは、科学者（自身）の活動が科学的真理の追求に有効なものであることを正当化するという類いの行為である。そして、諸基準に従っていることと、そうした基準に従っていると言うことは別々のことである。よって、具体的に観察可能な行為において、厳格な諸基準が厳守されているのかどうかはまた別の問題ということになる。とはいえ、こうした言及からすれば、シュッツが科学的理論化の態度として定式化されたものが労働行為においては何の関係もない、と主張することはできない。そうした態度は、科学実践の一端において言及されている。つまり、単

に科学的理論化の特性として主張できるばかりでなく、当の科学者の様々な実践の資源ともなっているのである。

第一の論点なども考えた上で提出することのできる第二の論点は「シュッツの著作では、また、自然科学の活動において常識的知識が果たす役割がいくぶん曖昧である」[Lynch 1988:81]というものである。シュッツは、例えば「後者[科学的な思惟において使用される用語と観念]は、錯綜した前科学的思惟の隠された諸含意を明らかにすることによって、そうした思惟を判明なものに変えることをとりわけ必要とする」[Schutz 1962=1985:64]と主張する。こうした主張が科学的理論化と労働行為としての科学の弁別的区別の後になされるのであれば、労働行為としての科学活動は錯綜した前科学的思惟に充ち満ちていることが含意されかねない。以下、この主張から生じる二重の問題を指摘しておきたい。

まず、第一に、この主張は、常識的合理性を強調するシュッツの主張との折り合いがよくない。もし、常識的概念を単に科学的概念によって修正されるべきものとみなすのであれば、それは「自殺」という概念にたいしてデュルケームがとったような常識に対する修正主義的な態度と変わらないものになってしまう。常識的概念は曖昧で、誤解に満ちており、厳密でも正確でもないものなので、科学的概念によって修正されねばならないものだという扱いを受けることになる。シュッツの諸議論を考慮にいれるのなら、この主張は誤解を招きやすいものであると思う。

第二に、もしもこの含意を受け容れるとすると、それは実験室研究の諸知見と齟齬をきたすことになる。例えば、実験室の活動がその後の発表や論文と強く関係していることがラトゥーア&ウルガーによって指摘されている[Latour & Woolgar 1979:75-81]。彼らは「リテラリー・インスクリプション」という概念を提出し、科学実践に用いられるメモから論文にいたるまでの読み書きの過程に注目していく中で、言明のタイプを五つに分け、そのタイプの特性がその言明の事実の程度に対応すると主張する。その分類の基準とされるのは、「～と最近になって確証されてきている」や「かもしれない」などの限定句のような諸様相や（「私が思うに～」や「あの実験グループの主張によれば～」といった）著者性である。そうした諸様相や著者性を言明から取り外していくことが、論文執筆によって完成するまでの一連の科学活動ということになる。

ラトゥーア&ウルガーによる、このような言明タイプへの焦点化において、ここで注目の点以下の点である。まず、実験室の活動は、局所的な知識から普遍的知識への改変作業として特徴づけられている⁽³⁾。それゆえ、このように指摘された実験室活動の特徴は、むしろ、シュッツが科学的理論化の態度において述べ、また、そこで参照されている社会科学方法論とも結びつくものである。例えば、ラトゥーア&ウルガーによる実験室活動の特徴づけを、「直接的で原的な諸体験」の表現としての言明と両立可能なかたちでその言明の事実的地位を上げていく作業とみなすことは可能であろう。また、そうした言明の変換過程こそ「科学的な手続きに関する厳格な諸基準に従って進行する一つの過程」[Schutz 1962 =1985:64]なのだと主張することもできると思う。

また、実験室活動へのラトゥーア&ウルガーの焦点の合わせ方は、明らかに、実験室活動という労働行為と、論文執筆の過程に代表される科学的理論化を弁別可能な特性によって排他的に区別してはいない。むしろ、彼らは両者を一連の過程として特徴づけている。これらの点を踏まえれば、やはり、科学的理論化だけによって、科学が科学たる弁別の特

性を背負わせるには無理がある。もちろん、そうであるからと言って、労働行為としての科学にはシュッツの言う「科学的理論化の態度」しかないというわけではない。そうした主張はまた、実験室のエスノグラフィー研究の他の知見と齟齬をきたすことになる。

よって、この二つの論点から確認できることは二つある。一つは、労働行為としての科学の中にも「科学的理論化の態度」が入り込んでいることである。もう一つは、仮にも労働行為としての科学と科学的理論化の弁別的な区別を主張するのであれば、その区別の妥当性じたいは、概念定義によってもたらされるものではないということである。それは、既に成し遂げられている、理論化も含めた科学実践をつぶさに見ていくという経験的研究によって明らかにされるべき事柄なのである。

4. 科学的理論化の日常性

さて、ここまで、労働行為としての科学において科学的理論化の態度が関係することを論じてきた。よって今度は、まず、科学的理論化それ自体を一つの実践として経験的に例証していきたい。その上で、その例証からこの区別の妥当性について検討したい。

ところで、この労働行為としての科学と科学的理論化の弁別的な区別は、シュッツによる科学と日常性の区別に由来している。もちろん、先に述べたように、この区別が社会学において果たした役割を軽視することはできない。この区別こそが常識的合理性それ自体を解明していく方向性を与えたのであり、この方向性自体はガーフィンケルによって受け継がれていったものでもある[Garfinkel 1967:Chap.2]。しかし、こうした弁別的な境界設定こそ、エスノメソドロジーにおいて問題視されてきたものである。そうした境界設定によって含意されがちな科学的特権こそ、科学のエスノメソドロジーが否定してきたものである。

では理論化とは、そもそもどのような活動なのか。ライルは、コロンブスの航海やケプラーの観察を挙げて、理論構築が机上の作業に限定されないことを論じている[Ryle 1949=1987:423]。また、実践理論などという言葉进行を思い浮かべれば容易にわかるように、理論化は科学の独占物ではない。日常活動の中に理論はいくらでもある。とはいえ、こうした理論の日常性だけでは、科学における理論の弁別性の主張の論駁にはならない。実際シュッツは、こうした理論化とは異なるものとして科学的理論化について論じているのである[Schutz 1962=1985:58-9]。それゆえ、シュッツの弁別的区別を検討するのであれば、科学的理論化を探究対象としなければならないのである⁽⁴⁾。

(1) 理論化作業：記号読解の実践

では、科学的理論化それ自体を検討していきたい。ここでは、社会学における理論化を科学的理論化の一例とみなし、その一つとして「記号読解の実践」に注目する。あらかじめ述べておけば、正確な概念定義などではなく、この実践こそが理論的構成概念の実在性を、記号と指示対象の関係を逆転的に利用することによって實際上構築しているのである[Baccus 1986]。この記号読解の実践のきわめて典型的なものとして、デュルケームの『自殺論』の一節「自己本位的自殺」[Durkheim 1897=1985:171-259]を取り上げたい⁽⁵⁾。周知のように、『自殺論』におけるデュルケームの基本的目的は、個人的ではなく社会的な、自殺の原因を解明することにあった。

まず最初に注目すべきことは、自然言語としての自殺を科学的に修正した上で分類された項目の一つである「自己本位的自殺」はもちろん、その統合・不統合が論じられる「社会」も同じように理論的構成概念であるということである。この「社会」という理論的構成概念はこの著作において特有の地位を占めている。そして、この二つの概念の関係こそデュルケームの証明したい点である。

次に、デュルケームは、自然言語において既に秩序だって用いられている自殺という概念を、曖昧であるとして科学的に修正しながらも、この概念が持つそもそもの特有性は保持したことである。その特有性とは、この概念が、それによって示されている対象の直接的な観察可能性をかなりの程度削り取っているというものである。つまり、自殺という行為はなかなか目撃できないものであり、死体による特定は必ずしも確実とは言えないということである。よって、この理論的構成概念の可視化には、自ずと指標が利用可能でなければならないことになる。実際デュルケームはいくつかの指標を用いた。これらの利用可能性をとおして、「自己本位的自殺」そして「社会」は現実のものとなっていく。以下、このことがいかに達成されるのかをごく簡単に検討したい。

「自己本位的自殺」の指標として用いられるのは自殺者数である。しかし、記録上の自殺者数は「自己本位的自殺」をした者の数などではない。にもかかわらず、(この節での)自殺者数は「自己本位的自殺」の指標として想定される。この想定を‘現実’のものとするには、すなわち、この理論的構成概念を産出するためには「著者は、読み手にとっては既にお馴染みのものである、より一般的な人物／出来事カテゴリーに、自らの研究の個々の対象を結びつけなければならない」[Gusfield 1976:25]。この節でデュルケームが行った社会学的推論は、自殺者を何らかの「社会集団」の成員として割り当てることである。

社会集団として第一に用いられるのは宗教である。ここで、ある宗教教団に籍を置く者ならどんな者であれ、その宗教「社会」の成員としてカテゴリー化される。このことの含意はかなり強い。なぜなら、書かれたものを意味あるものとして読解していこうとする限り、その成員が担うことのできる他のカテゴリーは、さしあたり脇へ寄せられるからである。そして各宗教に「社会集団」としてのその特性が付与され、その特性が自殺行為と関連づけられることによって「自己本位的自殺」が語られる。「自己本位的自殺」も集団としての宗教「社会」も、他ならぬその経験的証拠であると想定可能なものとして導入された自殺数、及び宗教の特性を通して始めて観察可能なものとされる。つまりは、そうした指標の使用を通して、空想の産物ではなく、世界に実在するものとされるのである。

このような概念の実在は、通常は疑問視されることのない、物理的対象の「素朴な実在」と同様に考えることはできない⁽⁶⁾。つまり、個々の自殺数が「自己本位的自殺」となるのは、「社会集団」の(不統合という)特性を自殺行為の原因として、統計上確認できる自殺者に帰属させるという実践を叙述において達成することによってなのである。仮にこのような実在を是認するにしても、それと常に同時に行われなければならない、この、実在を実在たらしめている実践を実在と切り離して考えることはできないのである。

また、宗教「社会」の自殺者数だけが「自己本位的自殺」の指標となるわけではない。ここで特有に用いられている「社会」概念は家族と政治にも適用される。つまり、どちらの「社会」も「集団」としての観点から特定化され、そのことが自殺行為と結びつけられる。「社会」および「自己本位的自殺」という概念双方が宗教特有のものとしてだけ実在

するのではなく、遍在することを示すことによって初めて、それらの一般性、及びその確固たる実在性を主張できるのである。

それゆえ、いくつもの「観察可能な」指標を並べることができたので、これら理論的構成概念の実在性が確保されたという主張の含意はそれほど素朴なものではない。理論的構成概念というものは指標とは別個に存在するものなのだとということ、つまり、指標とされたものがまさに何らかの理論的構成概念の指標であること、このことを納得のいくものとして指し示すには、いくつかの指標を用いることが非常に有効に作用するということなのである。宗教、家族、政治に「社会」集団としての一貫した特性があることを示すことによって、「社会」、そしてここでは「自己本位的自殺」が、それぞれの「集団」に出現しながらも、そのそれぞれとは独立に実在することが主張できるのである。

かくして、以下のようにまとめることができる。理論的構成概念の実在性は、観察可能な現象をその概念の指標として利用できるように配置する叙述を構成すること、すなわち記号読解の実践によって獲得される。指標の数値はその実践に対して補助的に作用するのであって、それ以上のことを行い得るものではない。

また、ここでの指標と理論的構成概念に割り当てられた記号と指示対象の関係を、理論的構成概念どうしの関係にもデュルケームが適用したことは、彼のこの実践への依存のほどを明らかにしてくれる。彼は、宗教・家族・政治などを「社会」集団として捉えることだけによって「社会」の実在性を唱えたのではない。彼にとって、自殺行為とは「当の社会的状態を外部的に表現」（強調は原著者）しているものなのである。「自己本位的自殺」は実在するものとして構築されるだけでなく、今度はこの特有の「社会」概念の実在を保証することになる一つの指標として、「集団本位的自殺」や「アノミー的自殺」とともに用いられていくのである。

(2) 記号読解の実践の日常性

さて、ここでこの実践を取り上げたのは、科学的理論化と労働行為としての科学の弁別的な区別の観点からこの実践を位置づけるためである。まず、こうした記号読解の実践は学問においてのみなされるようなものではない。例えば、この実践は、ガーフィンケルが論じた自殺防止センターにおける実践と形式的な類似点を持つ[Garfinkel 1967:11-8]。ガーフィンケルが注目した自殺防止センターの実践とは、（自殺か他殺かはっきりしないような）「突然の不自然な死」を少なからず確定していく作業であった。まず、こうした死のケースは端的に観察可能なものではありえない。よって、この実践は、「その死に関係する」と理解可能／観察可能な遺品や逸話を繋ぎあわせていく作業なのである⁽⁷⁾。そして、この作業の特性として挙げられているさまざまなものから、ここで注目したいのは「死を、先行する事実(precedant)として扱う」というものである。

ある死体がどの死によってもたらされたのか。実践者は、しばしばこのことを予め想定した上で調査を行っていく。そして、そのように想定された死を指し示すものとして理解可能な遺品や逸話が焦点化され、またそれが前提となって更なる探求が繰り広げられていくのである。つまり、いくつもの既に挙げられている遺品や逸話の中でいったい何がその死に関わるものであるのか、その他にも探さねばならないものはどのようなものなのか、関わりあるものとして挙げられたさまざまな遺品や逸話はいったいどんな関わりを持つのか

か、こうしたことは、しばしば、予め特定の死を想定した上でなされていく。

このようにして、予め特定の死を想定した上でその証拠となるものを焦点化する作業は、先に論じた記号読解の実践と同様の形式的特性を持っている。つまり、この場合ならば、想定上の特定の死に、その不可視性のゆえに先に理論的構成概念が占めていた地位を受けることができる。そして、焦点化されていく遺品や逸話には、その可視性および特定の死を指し示す役割を果たしているがゆえに、指標の地位を受けることができるのである。

もちろん、この二つの事例は自殺という自然言語に関わるものであり、この概念の用いられ方に依存するところは大きい。しかし、ここで主張したいのは記号読解の実践の特有性よりもむしろ、その日常性--他の実践との共通性--である。よって、この実践が、直接には観察不可能なものを可視化する際に使われてきた実践と類似するものであることを述べておきたい。

記号読解に類似する実践として予測や説明について考えてみたい。例えば天気予報は、統計学的なデータに基づいて出される予測である。この場合、現在の大気の状態という観察可能な事態から、未来の大気の状態（そして、未来の天気）という観察不可能な事態を予測する。ここで注目しておきたいのは、天気予報はその未来が現在として訪れた時点で間違いであったことが判明することもあるということである。もちろん予測の是非をめぐっては、解釈の多様性が入り込む場合がある。とはいえ、予測の方法が論理的に説明可能/反証可能である度合が高ければそれだけ、その予測と予言との区別は際立つ。

予測と説明は構造を同じくするものの、予測は未来志向であり説明は過去志向である点で大きく異なる。つまり、予測の場合は原因に観察可能性、結果に観察不可能性が付与される一方、説明の場合には原因に観察不可能性、結果に観察可能性が付与される。

こうした説明の構造は、なにも天気予報のような現代科学を駆使した領域に限定されるものではない。それはもっとプリミティヴな日常レベルにおいても見ることができる。例えば、登山者なら誰も暗雲から雨を予測する。この関係は、統計的蓋然性に基づいた因果性を持つことが一般に知られてはいるものの、因果性を超えて規範的期待を持つことがある。例えば「暗雲があるのにどうして未だに雨が降らないのか」といった具合である。

規範的期待は事実の是非に関わらず維持されるわけだが、この期待から観察不可能な過去の事実が導き出されることがある。この時、予測は説明に代わる。そして、この規範性があからさまにならなければそれだけ一層、そうした過去の事実の導入は「憶測」としては語られず、事後的地位を強くする。このことを上記の例で考えるのなら「雨が降るのなら暗雲があったのだ」といったことになるであろう。そしてその際には、暗雲の实在が観察によらずに措定されるようになっていく。そうした推論の形式が、観察不可能な対象の实在を主張できるものとしていく。つまり、規範的期待が付着した「原因」としての暗雲について、その観察不可能性は問題あるものとはされないのである。

それゆえ、記号読解の実践は、観察不可能なものの可視化という点で上で取り上げたような説明と類似する。両者の相違は、記号読解の実践が記号と指示対象の関係を利用して一方で、上記の説明が経験則に基づいた因果関係の規範化に依存している点である。このことからすれば、記号読解の実践とは、科学的理論化に何ら限定されるものではないし、実践的推論を明確に／厳密に更新したものでもない。むしろ、この実践は、直接的には観察不可能なものを可視化する諸々の実践の中に位置づけることができる。よって、記

号読解の実践が社会学の理論化作業の特性として把握できる以上、科学的理論化は日常実践と弁別的に区別できるものではない。それゆえ、こうまとめて良いだろう。日常実践の特性を保持するとされる労働行為における科学からも、科学的理論化は何ら弁別的に区別されるべきものではない、と⁽⁸⁾。

5. 結

以上、科学的理論化と労働行為としての科学の弁別的な区別について論じてきた。その際、本稿は二つのアプローチをとった。一つは、実験室の実践についての既存の研究の知見を用いることで、この労働行為においても「科学的理論化の態度」が含まれることを論じた。もう一つは、科学的理論化という実践それ自体を検討することによって、そこから抽出した方法実践が日常的なものであることを論じた。この二重の論証によって、科学的理論化と労働行為としての科学を弁別的に区別することが不可能であることを示した。

この論証が、シュッツ科学論の批判となるのは言うまでもない。しかし、ここで主張したいのは、日常活動の常識的合理性を強調したシュッツでさえもこのような批判に晒されざるをえないということである。この批判はシュッツ科学論の批判にとどまるものではない。自らの学問実践を科学の名の下に根拠づけようとするどんな言明もこの批判を免れうるものではない。そして、そうした言明は社会学においても支配的なものである。

この論証に基づいた批判によって科学の不可能性を主張するのは簡単なことであるが、既に科学という名の下に学問実践が織り成されているという事実はそれでも残る。また、この批判は、明らかに、基礎づけによって自らの主張を根拠づけようという態度に向けられている。常識と弁別的に区別可能であるがゆえに特権的な地位を持つ科学などというものはやない。そして、それにもかかわらず、我々はお互いの研究成果を理解可能なものとしている。これらのことからすれば、基礎づけ問題は疑似問題である。この論証は、基礎づけ問題の解消をもたらしているのである。よって、基礎づけ主義もありえない。

この基礎づけ主義の消滅は二つの研究の方向性を示している。一つは、常識的概念に関わるものである。もはや我々は、これまでの社会学が採用してきた、常識的概念にたいする修正主義的な態度をとるべきではない。そうではなく、常識的概念それ自体の用いられ方をそれが用いられる場面にそくして記述していくという新たな方針をとるべきである。会話分析の創始者ハーヴィー・サックスは、『自殺論』を取り上げて、早くからこのことを主張している。「自殺というカテゴリーを記述し終えるまでは、つまり、この種類のものとなる事例を集めるために用いられている手続きの記述をし終えるまでは、いくらかであれ、このカテゴリーが社会学の装置となる可能性すらないのである」[Sacks 1963:8]。

いま一つの方向性は既存の研究の理解可能性に関わるものである。既にこれまで行われてきた諸々の学問は、弁別的な区別によってもたらされた基礎づけによって確固たるものとなっているわけではないことをこれまで論証してきた。ならば、我々はお互いの研究成果をいかにして理解可能にしているのか、このことこそ問うべき事柄なのである。方法論が要請する事柄とは別様な日常実践によって科学は織り成されている。そうしたあり様こそ、未だに明らかにされていない領域なのである。つまり、この方向性は学問的営為それ自体の探究を促す。そして、本稿で取り上げた記号読解の実践も、こうした探究の一つとして位置づけることができる。記号読解の実践は、理論化作業の理解可能性を支える一

つの資源なのである。こうした資源、及びその用いられ方が理論化を可能にしている。

シュッツは科学的合理性が「日常生活における人間行為を解釈する際の方法論上の原理ではありえない」[Schutz 1964=1991:117]ことを早くから述べていた。しかしガーフィンケルは、この主張を受け継ぎながらも、科学的合理性を理論化に閉じ込めるのではなく「経験上問題のある素材としてだけ扱われねばならない」[Garfinkel 1967:282]としたのである⁽⁹⁾。こうした経験的研究の方向性こそ、ここで論じた科学と日常性の弁別的区別の解消に繋がるものである。こうした意味で、この後に行われていく科学のエスノメソドロジー研究の方向づけは、シュッツによる概念定義を経験的に問うていく作業の中に既にある。科学のエスノメソドロジー研究とは、科学方法論の中に閉ざされていたトピック--観察、測定から、概念定義、理論化まで--を実践として捉えていく試みなのである。そして、本稿における論証もこの方向性を一歩押し進めていくものに他ならない。

註

- (1) ここで取り上げていくシュッツの科学論はシュッツ自身の立場ではなく、構成的現象学というシュッツの方法による分析である、という指摘もある[浜 1998]。この指摘の包括的検討は著者の能力を越え出ているが、シュッツ科学論じたいの妥当性に関するものとしては、本稿の問題設定は理に適ったものである。また、[西阪 1998]参照。
- (2) なお、ここでリンチが取り上げている研究が対象としているものは、ほとんどが自然科学である。確かに、自然科学と社会科学では、何をもって自らを基礎づけるのかに関して差異があることもある。ただし、基礎づけ主義的な態度をとること自体はどちらも変わるところがない。本稿は、さしあたりそのレヴェルでの議論を展開している。
- (3) もちろん彼らの特徴づけは、彼ら自身認めるように、形式的なものであり、場面の一構成要素としてある言明がその都度どう扱われているのかにたいする配慮がたりない。これに関しては、例えば[Lynch 1993:chap.3]を参照。
- (4) 「伝達のパラドックス」[Schutz 1962=1985:72]というシュッツの主張について述べておきたい。シュッツによれば、理論家の科学的理論化作業は孤独なものであるが、そこからその理論的思惟がいかにして伝達されるのかという問題が生じることになる。伝達のパラドックスがパラドックスたりうるのは理論的思惟が超越論的領域における問題である限りであるわけだが、これに対するシュッツの主張はあまり一貫していないように思われる。少なくとも私は「個人を単位とする存在論」[Coulter 1979=1998:48]ではなく、日常言語の公的な理解可能性を出発点に据えるので、科学的理論化が孤独なものであることは伝達のパラドックスを生まない。しかし、この点でシュッツの主張を拒否したとしても、科学と日常性の弁別的な区別という論点は解明されるべきものとして残るのである。
- (5) 以下の分析じたいは[中村 1997]よりの抜粋である。ただし、修正を加えたばかりでなく、その含意については本稿において拡張したものである。
- (6) もっとも、素朴な実在ですら、ある一定の記述の下に見るという点では概念負荷的であり、素朴と片づけてしまうのは危険だが、解釈を要しないという意味では素朴である。
- (7) この点は[Atkinson 1978]によって掘り下げられている。また、[中河 1999:chap.2]参照。
- (8) この主張にたいして、シュッツは理論化の産物については述べておらず、理論化作業における個人の意識としての科学的理論化-理論的思惟-についてのみ論じていたという批判があるかもしれない。しかし、もしそうならば、シュッツは、作業から分離可能な意識なるものをその作業の構成的特性として想定していた点でそもそも誤っていることになる。ここでは、そのようなシュッツ解釈は避けた。また、本稿のシュッツ科学論批判をある程度先取りしたものとして[矢田部 1998]を挙げることができる。矢田部が言うように、科学と常識の弁別的区別に適用条件を設けることが認められるのであれば、本稿の論証はシュッツ批判にはならない。そうした作業じたい、シュッツの更なる可能性を導きだす試みであるが故に画期的である。とはいえ、矢田部が言うように、科学と常識の弁別的な区別を「行

為者」がたてる「モデル」にすぎないものと考えるのであれば、いったいそうしたモデルがどのような実践においてそもそもたち現われてくるのかを解明しなければならないことになる。つまり、あるカテゴリーやカテゴリー対は状況的に達成されるものである以上、そのような場面性・状況性を超越するような一般の妥当性を含意するモデルというものの地位を不問に帰すことはできない。また、労働としての科学と科学的理論化のような分析的区別がシュッツの著作を越えて関連性を持つ場面は、なかなか想像しがたい。いずれにせよ、常識と科学の区別を設けたシュッツの主張にはそうした状況性を示唆する点があるとするのなら、それは革新的な解読だと思われる。とはいえ、そうした解読の是非は著者の能力を越え出ている。

- (9) 従って、ガーフィンケルのシュッツ解釈の「ねじれ」[中村 1996:76]は、(論理的ではなく)経験的な事柄に関してはその研究に先立った概念定義に依存しない、という方針に限定されるべきである。この点を示唆して頂いたことに匿名のレフェリーに感謝します。

付記：本稿執筆にあたって、上谷香陽（日本学術振興会特別研究員）、皆川満寿美（武蔵大学他非常勤講師）の両氏に有益なコメントを頂きました。記して感謝の意を表します。

文献

- Atkinson, J. 1978 *Discovering Suicide*. Macmillan.
- Baccus, M. 1986 “Sociological indication and the visibility criterion of real world social theorizing”, in Garfinkel(ed) *Ethnomethodological Studies of Work*. Routledge.:1-19.
- Durkheim, E. 1897 *Le Suicide*. 宮島喬（訳）『自殺論』中公文庫 1985
- 浜日出夫 1998 「シュッツ科学論とエスノメソドロジー」 日本現象学・社会科学会研究例会報告レジュメ
- Garfinkel, H. 1967 *Studies in ethnomethodology*. Prentice-Hall.
- Gusfield, J. 1976 “The literary rhetoric of sciences: comedy and pathos in drinking driver research”, in *American Sociological Review* (41):16-34.
- Knorr-Cetina, K. 1981 *The Manufacture of Knowledge : an essay on the constructivist and contextual nature of science*. Pergamon Press.
- Latour, B. & Woolgar, S. 1979 *Laboratory Life : The social construction of scientific facts*. Sage.
- Lynch, M. 1988 “Alfred Schutz and the Sociology of science”, in Embree, L.(ed.) *Worldly Phenomenology*. Center for Advanced Research in Phenomenology & University Press of America.:71-100.
- Lynch, M. 1993 *Scientific Practice and Ordinary Action*. Cambridge.
- 中河伸俊 1999 『社会問題の社会学 -構築主義アプローチの新展開-』世界思想社
- 中村和生 1996 「エスノメソドロジー的関心：科学の日常性」『現代社会理論研究』第6号:73-86.
- 中村和生 1997 「理論化作業の実践学的探究」年報（関東社会学会）第10号:181-192.
- 西阪 仰 1998 「リブライ」『現代社会理論研究』第8号:264-265.
- Ryle, G. 1949 *The Concept of Mind*. 坂本百大・宮下治子・服部裕幸（訳）『心の概念』みすず書房 1987
- Sacks, H. 1963 “Sociological Description”, in *Berkeley Journal of Sociology* (8):1-16.
- Schutz, A. 1962 *Collected Papers I* 渡部光・那須壽・西原和久（訳）『社会的現実の問題Ⅰ』『社会的現実の問題Ⅱ』マルジュ社 1983
- Schutz, A. 1964 *Collected Papers II* 渡部光・那須壽・西原和久（訳）『社会理論の研究』マルジュ社 1991
- 矢田部圭介 1998 「意味とワーキング」西原和久他（編）『現象学的社会学は何を問うのか』勁草書房:144-166.

(明治学院大学・非常勤講師)